

2025年1月28日（火）

老球の細道850号

全会津男女総合選手権大会兼第31回百井杯兼第1回松井杯観戦雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

全会津男女総合選手権大会は、私が高校時代の頃「会津選手権」と呼ばれ、「十日市」の頃に毎年行われていた会津バスケットボール界の風物詩だった。当時は大雪の日が多く、体育館も雪が舞い込む高校の体育館で行われた。暖房もなく、ウェアも現在のようなウインドブレイカーなども着ない。手が冷たくてかじかみシュートをするのも容易でなかった。

1991年に当時会津協会の会長であった百井建二先生（松枝病院長）が会長職を退任する時に会津選手権大会の優勝杯へと寄贈されたのが「百井杯」であった。百井建二先生は原町高校のOBであったので、私が原町高校の顧問をしている時はお世話になった。

あれから31年が経過し、百井杯も老朽化の兆しが顕著になった。そのことが協会役員の中で話題に上った時、前会長の松井遵一郎先生（元坂下厚生病院長、前県立南会津総合病院長）から新たな優勝カップ寄贈の申し出があった。義侠心の厚い先生は昔から皆が困っている時や頼まれごとには人肌を脱ぐのが常であった。今でも私よりも高齢でありながら坂下厚生病院で診察治療にあたっている。病院では誰よりも元気な声で動き回ると評判である。昨年トップアスリートにおいてもコートに立ち、子どもたちに激をとばしてくれた。第1回松井杯、そんな松井先生の期待に応えられる大会になっただろうか。

今大会は10代の高校生から60代の高齢者まで幅広い年齢層と会津地区外からの多数の選手が混在したものとなった。現代社会のキーワードである「多様性」「包摂性」「グローバルイゼーション」「健康寿命」などを彷彿させる。

女子決勝で惜しくも負けてしまった「Glanz」というチームは会津地区でミニから中学まで育ち、高校は福島、郡山の学校に進学してインターハイ、ウインターカップ出場経験者が主力を占めるチームであった。今回初出場であったが、葵高校監督の村山先生と渡部大介氏の協会技術委員コンビがチームをよくまとめ、昨年優勝の「Ivy」と最後まで激しく渡り合ったが若さには勝てなかった。Ivyは小兵ながらよく鍛えられたチームであった。

男子決勝戦は準決勝が白熱していたので、レベルの高いゲームを期待していたが、残念ながらBリーグオールスター戦のようなノーガードで3Pの打ち合いになってしまった。バスケットボールの本質は邪魔がいること（ディフェンス）とチームプレイにあることを考えると、能力のある選手がそろっているだけに繰り返すも残念であった。

閉会式においては、会津地区バスケットボールの復活を願う私は、レジェンド江川嘉孝氏、そして現在Bリーグで選手、コーチ、審判で活躍する先駆者の話をした。これから次に続く人材が本大会参加者の中から数多く出て欲しいからである。そして可能だからである。

本大会は会津協会最高のトップトーナメントである。二日目の決勝戦においては、大会会場観客席が高校、一般関係者だけではなく、ミニから中学までの選手、コーチ、保護者で体育館が満員になることを夢見ている。